

ヴェニスの商人

作=W・シェイクスピア/訳=小田島雄志

演出=グレン・ウォルフオード

製作=松竹株式会社

サンシャイン劇場5・6月公演 サンシャイン劇場★5月20日[金]→6月12日[日]
世界遺産姫路城記念行事 姫路市文化センター大ホール★6月18日[土]・19日[日]
キャスト/バル'94 主催=財団法人姫路市文化振興財団

最近の日本における シェイクスピア劇上演

佐々木 隆

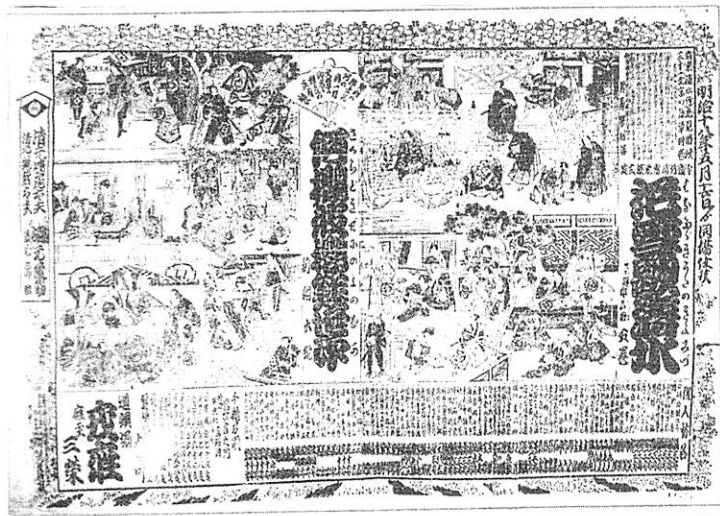
武蔵野短期大学
国際教養学科専任講師

日本でシェイクスピアの名が最初に登場したのは、まだ鎖国政策をこつていた天保十二年(一八四一)にオランダ語版から渋川六蔵が訳した『英文鑑』(下編)で「シャーケスビール」という表記であった。明治七年(一八七四)には、チャールズ・ワーグマンが『ザ・ジャパン・パンチ』の中でハムレットの名台詞を「アリマス、アリマセン、アレワ、ナンデスカ」と紹介したローマ字訳まで登場した。最初の翻訳は、明治十六年(一八八三)に河島敬蔵が『日本立憲政黨新聞』に連載した『欧州戯曲ジュリアス・シーザル』で、翌年には坪内逍遙が『該撤奇談自由太刀餘波鋭鋒』を世に送り出している。そして、明治十八年(一八八五)には『ヴェニスの商人』を『何枚彼桜銭世中』と題して、大阪の戎座で、わが国で日本人によって最初のシェイクスピア劇が上演された。

明治以来、シェイクスピア劇はさまざまな様式で上演されてきた。西洋演劇に初めて触れた明治初頭は歌舞伎調の翻案で上演されたこともやむを得ない状況であった。しかし、現在のシェイクスピア劇上演も翻案や改作がさかんなのは一体何故なのだろうか。現在、シェイクスピアは日本中のアンケラから大劇場に至るまで舞台をとことん狭しと闊歩している。毎週、シェイクスピア劇が上演されていない時がほとんどない程の勢いで、シェイクスピアは日本中に登場している。東京近辺だけでも、平成元年には五十九本、平成二年には八十三本、平成三年には九十一本、平成四年には五十二本、平成五年には六十一本、そして今年もすでに十数本のシェイクスピア劇が上演されている。しかし、その登場の仕方は実にさまざまである。特に最近では原作通り上演されることが少なく、翻案や改作といった形式や作品の枠組みはそのまま、時代設定を現代風にアレンジしているものが特に多い。また、シェイクスピアの作品を下敷きにしてまったく新しい作品を作り上げている場合もある。例えば、蜷川幸雄演出によるシェイクスピアには、日本的な要素を強く感じることができ、第三エロチカや花組芝居のシェイクスピア劇では現代風のアレンジが目を引く。また、野田秀樹や上杉祥三のシェイクスピアには、若者を引き付けるエネルギーと自由な発想がある。一方、伝統芸能の世界でもシェイクスピア劇に取り組んでいる。シェイクスピア作品そのものを上演しているばかりでなく、人的な交流もさかんで、歌舞伎俳優がシェイクスピア劇に出演することも珍しいことではなくなっている。

なぜこのような翻案・改作が多くなったのか考えてみると、二つの理由が考えられる。まず第一点は、これまでのシェイクスピア劇の演出が、海外上演の模倣的な要素が強かったことへの反省があげられよう。第二点は、新しいものを取り入れようとする動きによるものだ。

では、今の状況の中で求められる姿とは一体何であろうか。それは原点に立



日本最初のシェイクスピア翻案劇「何按彼彼世中」辻番付(明治18年5月或座へ上) 中該撒奇談(「ジュリアス・シーザー」)辻番付(明治34年7月明治座へト) いずれも早稲田大学演劇博物館蔵(荒井良雄著「シェイクスピア劇上演論」より)

JULIUS CAESAR
作原氏ハビスクエシ

談奇撒該

場の説演國公(2) 場の事珍堂議(7)

明治四年七月十四日午前十一時一

エイクスピア劇の演出を手掛けてきた演出家グレン・ウォルフフォードが、どのような仕掛けをしてくるか楽しみである。外見にとらわれることなく、どのような実体をみせてくれるのか、期待はおのずからふくらんでくる。

現在のシェイクスピア・ブームは、昭和六十年頃から東京に新劇場が次々と建てられたことも大きな原因であろう。劇場の増加により、シェイクスピア劇が毎月見られるという現象が起きていることは、嬉しい悲鳴でもある。『ヴェニスの商人』も平成元年からの上演数はすでに十本を越えている。どれひとつとして同じ上演はない。

芝居というものは、昔もいまも、いわば自然に対して鏡をかがげ、善はその美点を、悪はその愚かさを示し、時代の様相をあるがままにくつきりとうつし出すことを目指しているのだ。(小田島雄志訳『ハムレット』より)

これがシェイクスピアの心であり、時代がシェイクスピアを求めているのだ。